

三里山の野鳥調査

北日野小学校 八 田 弘

三里山は省線鯖江駅より約2 Km東の方に、他の山なみとは分離してあります。山の屋根は起伏して南東方向に約4 Kmにわたり、市約2 Km高峰でも300 m前後の小さな山です。したがって山ふところも浅く中腹以下では杉が多いが、これ以上では松や広葉樹の混じり林が多くなっています。山ろくの県道を一週すると、花筐公園を持つ栗田部をはじめ13の部落があって、距離はちょうど12 Kmあるところから、三里山の名がつけられたものと考えられます。

この山全体および山ろく一帯が保護区（旧法の禁猟区）と指定されたのは昭和35年4月でした。鳥獣狩猟法の中で小さく取扱われていた保護対策も次第にクローズアップされて、38年には保護法改正の気運が実り、39年に施行となりました。これによって従来も行なわれていた野生鳥獣の棲息状態の調査が一層強化されるようになりました。保護区休猟区合わせて現在70箇所ちかいか中で比較的早く指定された地域7箇所について、県の調査員が調査を続けています。鳥のなき声や姿それもシルエットの場合が多い状態である私の識別はまだ幼稚園程度ですが、県林務課の御助言をいただいて調査の結果をまとめてみたいと思います。

1. 調査要項

- (1) 毎年5月と12月に3回ずつ、年6回
- (2) 隔週ぐらいとし、同コース、同時刻
- (3) 未明から始め、おそくとも午前中で終わる。（午後は鳥の活動が止まる。）
- (4) 1 Kmを1時間かけて、なき声を頼りにするだけでなく、樹の枝にひそむ鳥にも気を配る。

（特に12月の場合）

- (5) 自分の位置から両サイド20 m以内の鳥を調査対象とする。
- (6) 記帳は見聞の順に鳥種と頻度（個体数）を記入する。
- (7) 準備 双眼鏡、野帳、カメラ

2. 調査実施結果の記録

回		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	季区
2	ハシブトガラス	1		3				3	3	2				A
3	ハシボソガラス					2	2	2	3	3	3	3	2	A
9	カケス	7	3	1	2	17	4				5	7	5	A
11	ムクドリ												6	A

回		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	季区
鳥 種														
15 スズメ								44	58	50	37	28	34	A
17 ツ メ		3												F
18 イカル		16	11	5	1			3	4	2		1	1	A
20 コカワラヒワ		2		12	7	5	5	9	12	7	10	3	5	A
24 ウ ソ					4	2	7							A
41 アオジ		1												F
43 ホオジロ		17	20	7	8	14	5	8	10	13	28	11	14	A
44 ホオアカ											1			F
45 カシラダカ											1	7	30	F
55 ヒバリ		3												C
58 ビンズイ		1												C
63 セグロセキレイ								3	2	3	2	3		A
64 キセキレイ		2												C
67 メジロ		2	2	2							1	1	1	A
70 シジュウカラ		4	5	6	42	72	114	4	2	2	19	53	46	A
71 ヤマガラ		6	1		1	3				2	2	3	1	A
74 ヒガラ										2				A
75 エナガ		6	1	4	11	10					18	4	8	A
81 モ ズ				1							4	4	3	A
86 ヒヨドリ		13	13	1	30	23	34	11	12	14	26	20	15	A
87 サンシロウクイ		12	9	6				14	9	17				D
88 サンコウチヨウ		1	2						2	2				D
89 コサメビタキ		5	1	2										D
93 キビタキ		5	3	1					3	3				D
98 ウグイス			2						1					B
99 ヤブサメ		1	2											D
106 オオヨシキリ									3	3				D
114 シロハラ			34								1		2	F
118 ツグミ						15	23							F
133 ミソサザイ					5	10	1				4	5	3	B
135 ツバメ								12	16	11				D
140 セイロチヨウ			1											D
147 カワセミ											1			A
151 アオゲラ											1			A
155 コゲラ		4	6	2	3	5	5		3	1	1	2		A
162 ホトトギス										1				D
163 ジュウイチ			1											D

鳥 種	回												季 区
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
169 トラフズク	1												A
173 フクヨウ	1												A
182 ノスリ								1					A
187 オオタカ	9												A
188 ハイタカ	2												A
189 ツ ミ	3												A
190 ト ビ	1	1	4	1		1	1	2	6 (ヒナあり)	2	2	1	A
194 サシバ	1		1					2	2				D
203 アオサギ	1		2					1	2				B
207 コサギ										6			C
213 ゴイサギ	1	1									1		A
214 ミゾゴイ			1 (ヒナあり)										D
224 マガン					8								F
233 マガモ						30							F
234 カルガモ													A, F
236 コガモ						1							F
297 キジバト	4	2	4	13	2	1	2	3	2	4	2	3	A
424 キ ジ	2	1	2					1	3				A
425 ヤマドリ	4	1									1		A

(1) 種名の番号は原色日本鳥類図鑑(保育社)番号

(2) 1～6回は屋根歩き、7～12回は山ろき歩き

第1回	38年	5月	19	快晴	4:00～12:30
2 "	38	6	16	曇濃霧	4:10～12:00
3 "	38	7	7	晴	5:00～10:00
4 "	38	12	15	曇時々晴	10:00～12:30
5 "	38	12	22	曇時々雨	10:00～12:00
6 "	38	12	28	曇	10:20～12:30
7 "	39	5	3	晴	5:00～11:00
8 "	39	5	10	晴	5:00～11:00
9 "	39	5	17	晴	5:00～11:00
10 "	39	12	6	晴	7:00～12:00
11 "	39	12	13	曇	7:00～12:00
12 "	39	2	20	晴	7:00～12:00

(3)	A	留鳥	32種
	B	暖地への漂鳥	3種
	C	山奥への漂鳥	4種
	D	夏鳥	12種
	E	冬鳥	9種

(4) 60種を認めているわけですが、範囲が両サイド20mですから声や姿を認めても記録に残らない種類もいくらかありました。個体数についても勿論こういうことができます。

3. 結果の処理と感想

(1) 調査の結果は林野庁に送られ、1ha当たりの棲息数を算出するわけです。

(2) 本調査だけでは棲息状態の増減は判定できません。今後何年かの調査に待たねばなりません。しかし、私の子供の頃と比べてみますと確かに少なくなっていると言えます。数十羽のウソの群れが灰色の体に鮮紅のほおをみせ、ほろ甘い声を立てながら雪の中で桜のつぼみを食べに来たのや、ちよつと山にはいつはおいかけたヤマドリ、夕ぐれの秋の田から山に向かう20羽ものキジの群れなどは遠い昔の思い出となってしまっています。調査の先々でキジやヤマドリの棲息を聞いてもここ数年その姿をみないという農夫ばかりでした。

(3) 尾根歩きと山ろく歩きとでは森林の鳥村落の鳥とは一きりと棲息地を区別されているものもあります。

(4) ハシブトガラスは嘴の先の方が横からみた場合太くなっていて、だみ声ですが年間を通じてみられるハシボソガラスに比し、冬期には認められないようです。暖い地方に漂行するのではないかと考えられます。

(5) メジロ、シジウカラ、エナガなどは比較的多い鳥ですが1〜3回、7〜9回に少ないのは営巣期の単独行動と、雛を育てるために、ひそんだ生活をし、秋冬には群れをつくるためだと考えられます。

(6) ヤイロチヨウは日本でも記録の少ない鳥ですが数メートルの眼前にみた稀鳥でした。

名前の通り青や赤の原色で彩られたきれいな姿です。営巣でもとずいぶん探しましたが、1羽だけのようでした。2回目だったので、迷鳥とも片付けられないようです。

(7) ミゾゴイ 擬態をする鳥はいろいろありますが、これは抱卵中でしたが、敵に対しては正面を向いて徳利を立てたように頸を伸ばして微動もしませんが双眼鏡でのぞくと、あごの下あたりがヒクヒクとひっきりなしに動いているのは恐さのためでしょうか、おかしくもあり、いじらしくも感じました。こちらが動くと、それにつれて顔を回してくるのも愛嬌を思ま

した。純白の卵を4個持っていました。雛の巣立ちは10日ぐらいのようで早い方です。

(8) カワセミ なっかしい鳥でした。学生時代に通った山すその小川の上を背面の青光りする紋様をみせて飛ぶのをよくみたものですが、絶えて見なかったものでした。

(9) ヤマドリ ようやく姿を見せてくれた一羽でした。家の子供といっしょに行った時で、よく山遊びをする子供が「この谷川にはいつもいるよ。」との言も信じなかったのですが、指示した所にやはりいました。水浴や水飲み場はどこにでもいくらでもありそうですが、気に入った場所は少ないものだなと思いました。全身が光沢のある赤茶色で長い尾をひいて飛ぶ姿には心和むものがありました。

(10) 精しいデーターはまだまだでしょうが確かに鳥は少くなっているようです。耳にし、眼に入る一羽一羽にその生活を全うしてくれるように念じながらこの稿を終わります。